

# まほうやしき

江戸川乱歩

青空文庫



## 1

しょうねんたんていだんのなかで、いちばんからだが大きくて力の強い井上一郎さんに、小学校三年生のルミちゃんという、かわいい妹がありました。そのルミちゃんが、ある夕がた、ちんどん屋のあとについて、町はずれのさびしい森の近くまで行ってしまったのです。

井上くんは、おかあさんにたのまれて、ちようどそのとき、遊びに来ていた同じだんいんのノロちゃん（野呂一平くんのあだ名）とふたりで、方々さがしまわって、やっとルミちゃんを見つけま

したが、ルミちゃんは、ちんどん屋のおじさんがおもしろいものを見せてやるといふから、いつしよに行くのだといつて、どうしても帰りません。

「きみたちにも見せてあげるから、いつしよにおいで。それはふしぎなおもしろいものだよ」

とんがりぼうしをかぶり、だぶだぶのどうけふくを着て、かおにはまっ白なおしろいをぬったちんどん屋が、やさしくいいました。

そして、三人は、町はずれの森の中の古い赤れんがのせいようかんへつれこまれたのです。みんなが、入口をはいってドアをしめると、中はまっ暗でした。

「あら、ちんどん屋さん、どこへ行つたの」

ルミちゃんがさげびました。しかし、なんの答もありません。

井上くんは、手さぐりでルミちゃんをさがし、その手をとりました。おくびようもののノロちゃんは、井上くんのからだにしがみついています。すると、そのとき、むこうの方がぼうつと明るくなって、ちんどん屋のすがたがあらわれました。大きなまっかな口で、にやにやわらっています。

「さあ、これから、おもしろいものを見せてやるよ、えへへ」

そういったかと思うと、ちんどん屋のすがたが、水のゆれるようにぼうつとかすんで、まるで、えいがの二じゆう写しのようになつたものにかわってきました。そして、そこにあらわれたのは、

黒いシャツを着た、せいようあくまのおそろしいすがたでした。

「きやあつ」と、ひめいを上げて、さいしよににげ出したのは、ノロちゃんでした。井上くんもルミちゃんの手を引いて、入口へひきかえしました。しかし、入口のドアは、おしても引いても、あかないのです。いつのまにか、かぎがかかってしまったのです。ふりかえると、せいようあくまのからだに、またしてもふしぎなことが起っていました。あくまのからだは、足の方からとけるようにすうつときえていくではありませんか。そして、くびだけがのこって、ふらふらとくうちゆうにただよっているのです。しかも、そのくびが、口をあけて、けらけらとわらいだしたではありませんか。

三人は、おそろしさに声も出ず、み動きもできなくなつてたちすくんでいますと、このときとつぜん、ぱつとでんとうがついて、あたりが、ひるのように明るくなりました。あくまのくびは、もう、どこにも見えないのです。そこには、一まいのガラスの大きなドアがしまつていて、そのむこうは、一目で見えるろうかです。

じつにふしぎです。どうけものとあくまが、けむりのようにきえてしまったのです。しばらくしても、なに事も起りません。三人は、入口をふさがれてしまったのですから、どこかに出口をさがさなければなりません。そこで井上くんは、思い切つて、しよめんの一まいガラスのドアをおしてみました。すると、音もななくすうつとあくのです。

三人は、そのドアの外のろうかに出ました。見ると、むこうに小さな木のドアがあいたままになっています。

井上くんたちは、そこに近づいて、おずおず中をのぞいてみました。ドアの中に、もう一つのドアがあつて、それもあいています。そして、そのむこうに、でんとうのついた小さなへやがあるのです。

井上くんは、ルミちゃんとノロちゃんの手を引いて、その小べやにはいつてみました。

三人がはいると、二じゆうのドアがぴったりとしまつてしまいました。「あつ」といって、ドアにとびつきましたが、もうおそかったのです。にわかにはやが、大じしんのようにゆれ始めまし

た。

そして、じつにおそろしいことが起つたのです。あつというまに、この世がさかさまになって、ゆかがすうつとてんじょうに上がり、てんじょうが下になってしまったのです。三人ははらばいになって、死にもものぐるいに、ゆかいたにしがみつきました。

ああ、おそろしいゆめでも見ているのではないでしょうか。

## 2

しょうねんたんでいだんの井上くんと、ノロちゃんと、井上くんの妹で、小学校三年のルミちゃんの三人が入れられたへやが、

まつさかさまになったのです。いままでたっていたところが同じようになつてしまったので、三人は、「わっ」といって、つくえの足にしがみつきました。

ところが、ふしぎなことに、さかさまになつても、つくえもいすも、子どもたちも、てんじょうにくつついたまま、すこしもおちないのです。へんだなと思つてみると、へやはまた、ぐるぐるまわり始めました。もう目がくらんで、いまにも死にそうです。

そのうちに、へやのゆれるのがだんだんしずまって、やがて、ぴたりととまりました。三人は、きゆうに起き上がる力もありません。そのとき、へやの一方のドアがすうつとあいて、人の声聞きこえてきました。

「うふふふ……。おどろいたかね。早く、こつちへ来なさい。でないと、またへやがまわりだすよ」

三人はそれを聞くと、びっくりして起き上がりましたが、足がふらふらして歩けません。なん度もころびながら、ようやくドアの外へ出ました。

そこはまっ暗でした。そのやみの中に、ぽつと、二つの青い玉のようなものが光っています。

三センチほどのまるいものが二つならんで、ぎらぎらがやいているのです。

「ふふふ……。見えるかね。これは、わしの目玉だよ」

そんな声聞きこえたかと思うと、あたりがすうつと明るくなっ

てきました。そのうす明りで見えたものは……。

ああ、そこにいたのは、一ぴきのおそろしいライオンでした。

茶色の毛が、大きなかおの上にさかだつて、二つの青い目がぎらぎらと光っています。

三人は、「わっ」といって、さっきのドアにとびつきましたが、いつのまにかぴったりしまつて開きません。しかたがないので、へやのすみに、うずくまつてしまいました。

「ウォーツ」ライオンが、おそろしい声でうなりました。そして、のっしのっしと、こちらへ近づいてきます。

「ウォーツ」また一声うなつて、ライオンが、ぐわつとまっかな口を開きました。三人は、あたまからくわれてしまうのではない

でしょうか。

「わはははは……」

ふしぎ、ふしぎ。そのときライオンが、にんげんの声でわらいだしたのです。

「おまえたち、ここはまほうやしきだよ。だから、どんなふしぎなことでも起るのだ。さあ、見るがいい」

ライオンがぴよんととび上がってくるつとひっくりかえりました。

すると、ライオンのはらがまっ二つにわれて、そこから、さつきのせいようあくまの黒いすがたが、あらわれたではありませんか。にんげんが、ライオンの皮をかぶっていたのです。

「わははは……。どうだね。まだまだきみたちのびつくりするよ  
うなことが起るのだよ」

それから、せいようあくまは三人を二かいの一室にとじこめて  
しまいました。大きなベッドが一つおいてあつて、三人にそこで  
ねむれというのです。

そのへやには、鉄ぼうのはまった小さなまどが一つあるきりで、  
そこから月の光がさしこんでいました。

ノロちゃん、井上くんのかたに乗つて、まどから外をのぞい  
てみました。

まどのすぐ外に高いへいがあつて、そのむこうは原っぱです。

「あつ、いいことがある。バッジを使えばいいよ」

ノロちゃんとはびおりて、井上くんにささやきました。すると、井上くんもにつこりわらって、ポケットからしようねんたんていだんのきしよのB・Dバッジを一つとり出しました。

それから、上着のポケットから手ちようを出して、紙を一まいちぎり、えんぴつでなにか書いて、B・Dバッジをその中につつんでまるめました。ノロちゃんは、それを受けとると、また井上くんのかたにのぼって、まるめた紙玉を、力まかせに、まどの外へほうるのです。

バッジは、ほうるときの重しになったのです。

あくる朝のことです。ノロちゃんが、ふと目をさまして、ベッドの上を見ますと、そこには井上くんもルミちゃんもいなくなっ

て、二ひきのライオンの子どもが、ながながとねそべっていました。ノロちゃんは、「ぎやつ」とさげんで、ベッドからとびおりましたが、そのとき、自分のからだを見て、きぜつしそうになりました。自分のからだにも、茶色の毛がいっぱいはえていたからです。

## 3

井上くんと、ノロちゃんと、井上くんの妹のルミちゃんの三人が、まほうやしきにとじこめられ、ベッドでねむって目をさますと、三人とも、子どものライオンにかわっていました。まほうの

力で、ライオンにされたのかとびつくりしましたが、じつは、ねている間に、ライオンの毛皮をかぶせられていたのです。

朝になると、あのせいようあくまがはいつてきて、毛皮をぬがせてくれましたが、それから三人は、つぎつぎときみのわるい、ふしぎなものを見せられました。

へやを歩いていると、ゆかのおとしあながぱつと開いて、その下に、すべり台のようなものがあり、三人は、するするとちか室のそこへすべっていきました。

そのうす暗いちか室には、いろいろな形のロボットがたついで、ぎりぎりとは車の音をさせながら、三人をとりかこむのでした。

そのつぎは、四方のかべも、てんじようも、ゆかも、ぜんぶかがみをはりつめたへやへ入れられました。

三人のすがたが、かがみからかがみへとはんしやしあつて、なん百、なん千とかさなつて見えるのです。

井上くんも、ノロちゃんも、ルミちゃんも、あんなへんな気持ちになつたことはありません。なん百、なん千という自分が、上・下・四方からうじやうじやとかたまつて、自分をにらみつけているのです。

そのほか、まだいくつもふしぎなおそろしいものを見せられましたが、そのあとで、せいようあくまにつれられて二かいのろうかを歩いていきますと、とつぜん、どこからか、みようなわらい声

がきこえてきました。せいようあくまは、びっくりしたようにたちどまって、しばらく考えていましたが……。

あるへやへそつと近づいて、そのドアをぱつと開きました。するとそこに、思いもよらぬひとりのしようねんがたっていたのです。

「あつ、きさま。しようねんたんでいだんちようの小林だなつ」  
せいようあくまが、ぎよつとしたようにさげびました。

「そのとおり、ぼくは小林だよ。」

井上くとノロちゃんが、てちようの紙に手紙を書いて、B・D バツジを重しにしてまどから投げたのを、きんじよの子どもがひろって、ぼくにとどけてくれたんだ。それでぼくは、さつきか

ら、このまほうやしきにしのびこんでいたんだよ。さすがのまほうはかせも、ゆだんをしたものだね」

「えっ、まほうはかせだつて」

「そうさ。きみは、そんなせいようあくまにばけているけれども、ちやんとわかっている。『おうごんのとら』のじけんで、ぼくたちしようねんたんていだんに負けた、あのまほうはかせだ。こんどは、あのときのしかえしをしようとしたんだろう。だが、ぼくが来たら、もうだめだよ。ちよつと、そのまどから下をのぞいてごらん」

そういわれて、せいようあくまのまほうはかせは、思わずまどの外をのぞいたかと思うと、あつと行ってたちすくんでしまいま

した。二十人近くのしようねんさんていだんいんたちが、まほうやしきのへいの外をぐるつとりまいていたからです。

「きみが、井上くんたちをかえさなければ、あの中のひとりが、すぐ明智先生あけちとけいさつへ知らせるのだよ」

「負けた。わしの負けだよ。きみのいうとおり、ちよつとしかえしをしてやろうと思つたのだが、きみにかかつてはかなわない。B・Dバッジのつうしんとは、気がつかなかった。こんどもかぶとをぬいだよ」

まほうはかせは、ざんねんそうににがわらいをするのでした。

そのあとで井上くんやノロちゃんの話を聞いて、小林しようねんは、まほうやしきのひみつをみごとにときあかしました。

「この家の入口をはいつたとき、ちんどん屋のすがたがぼうつときえていって、せいようあくまがあらわれ、それがくびばかりになったのは、一まいガラスのドアをかがみに使ったきじゆつだよ。

ちんどん屋は、きみのぶかだったね。まず、ちんどん屋が、ガラスドアのむこうにたつてすがたを見せておいて、そのでんとうをけすと、まっ暗になつて、ちんどん屋は見えなくなる。そのとき、てんじょうにしかけたはこの中に、せいようあくまのきみがたつていて、そのはこのでんとうをつけると、ガラスドアの、ちようど、ちんどん屋のいたあたりへ、すがたがうつるのだよ。

それから、くびばかりになったのは、でんとうを動かして、かおだけにあてるようにすれば、むねから下は暗くなつて、ガラス

にうつらなくなるのさ。

もう一つの、へやがぐるぐるまわったのは、ゆうえんちなどにあるびっくりかんのしかけで、三人のたっているゆかは、ゆらゆら動くだけで、ひっくりかえりはしないのだ。

まわりのかべや、てんじようが、はこのようにできていて、それがくるくるまわるので、自分たちが、てんじように上がったようにかんじるのさ」

「うん、えらい。やっぱり小林だんちようのちえは、たいしたものだ。では、わしが負けたしるしに、あの三まいの子どもライオンの毛皮は、きみたちのおもちやにあげることにしようね」

こうしてしようねんたんでいだんは、またしても、おとなのま

ほうはかせをうち負かしてしまったのでした。

## 青空文庫情報

底本：「文庫の雑誌／ぼくらの推理冒険物語 少年探偵王 本格  
推理マガジン」光文社文庫、光文社

2002（平成14）年4月20日初版1刷発行

初出：「たのしい三年生」講談社

1957（昭和32）年1月号～3月号

※誤植を疑った箇所を、「江戸川乱歩の「少年探偵団」大研究  
下巻」ポプラ社、2014年3月第1刷の表記にそって、あらためまし  
た。

入力…sogo

校正：みきた

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# まほうやしき

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>